

REASON

他国の政治体制を武力で変えようと  
いうことを見直したい

中東を「民主化」するには、武力も辞さない。当時の米ブッシュ政権はそう言って、イラク戦争を始めました。その結果、「戦後」も含めて数十万人（いまだに正確な数字は発表されていない）のイラク人が命を失い、市民生活は何年も混乱に苦しむことになったのです。

いま、チュニジアやエジプトで民衆パワーによる独裁政権の転覆が実現する姿を目撃して、改めて、外国軍による政権転覆は、必要だったのかと、思いました。フセイン政権の弾圧を逃れて海外に避難していたイラク人のあいだで、米軍の手を借りても政権転覆を実現したい、と望んでい

た人びとがいたことは、たしかです。

イラク戦争を検証するうえで、武力によっても国民を抑圧する他国の政体を変えなければならぬ、という思想自体を真剣に考え直さなければなりません。米軍だから武力介入はいけぬ、ではありません。国内の人びとがこぞって求めれば、喜んで武力を使うのか。武力でないとすれば、国際社会は独裁に苦しむ国内の人びとに対して、いったい何をすべきなのでしょう。

イラク戦争を検証することは、現在の国際政治の安全保障観を根幹から見直すことなのです。



酒井啓子(さかい・けいこ)

東京外国語大学教授。1982年以来、アジア経済研究所でイラク政治を分析。86-89年、在イラク日本大使館に勤務。湾岸戦争時、イラク戦争時には、イラク情勢に関して積極的に国内メディアに発信を続けた。